

# AJELC Newsletter



第61号 2021年5月23日

		---目次---			
巻頭言	清水 あつ子	1	第76回例会報告	鈴木 雅子	7
会長断想	小川 貴宏	2		田中 ケアリー	9
第75回例会報告	石川 有香	4		小川貴宏・C・クレイゴ	10
	森住 衛	6	事務局だより		12

## 直接体験喪失の時代に

清水 あつ子

20世紀後半に米国で活躍した日系人のなかに、言語学者であり上院議員でもあった Samuel Hayakawa 博士がいる。専門の著作の他に、博士には子育てや教育についての示唆に富むエッセイが多数あり、障がいのある息子の父として書かれた文章には、強硬な政治姿勢からは想像も出来ないほど温かいまなざしが感じられる。1970年代にこれらの文章と出会った私には、心の健康には **directness** と **intensity** が必須だとする博士の主張がひどく新鮮だった。当時「五月病」と呼ばれていたのは、まさに受験の **directness** と **intensity** が急激に失われた結果だったのかと納得した記憶がある。

人類は Edward Hall のいう **extension**、すなわち自分の身体の延長物を作り出しながら進んできた。大地を直接踏みしめていた足に靴を履き、車や飛行機に乗るようになったが、これらは下肢の **extension** であ

り、コンピュータ、そしてインターネットは脳の **extension** といえる。もはやこれらの恩恵なしの生活は不可能に近いが、**extension** が便利さと引き換えに人類から直接体験を奪い、動物としての「人間らしさ」を抑圧してきたことも否定できない。夜明けとともに狩りに出て日没に戻るような、切実な生存を賭けた直接体験の暮しから遠ければ遠いほど、私たちの心の健康は脅かされるのである。

この1年間、私たちがインターネットにどれだけ助けられたかは論を待たないが、これほど直接体験が制限され、さまざまな活動が「不要不急」として片づけられた1年もなかった。人々の精神的不安の急増には単にコロナだけでなく、直接体験と、熱中できるような活動の不足も原因となっているに違いない。だからと言って、マスクを外して友と飲もう、熱く議論しようというわけ

にはいかないが、運動や手仕事など、何らかの形で身体を使い、オンラインでも双方向的に他者と触れ合う機会を保ち、学生にはこまめにフィードバックをするというように、意識して *directness* の不足を補うことはできる。

そして何よりも、実学以外は「不要不急」と軽視する風潮にめげず、「言語・文化」の研究に *intensity* をもって取り組んでいくことこそ、私たちがこの試練の日々を乗り切るための鍵となるのではないだろうか。

(明治大学名誉教授)

## 会長断想

### 会長つれづれ考～サブカルチャーにまつわる講演とものごとのきっかけ

小川 貴宏

まずは、3月のAJELC定例研究会にてクレイゴ氏と共同で行わせていただいた、サブカルチャーに関する講演をご清聴いただいた皆様に心よりお礼を申し上げます。

今回の講演は自分にとって非常に異例のものでした。私の本来の研究分野は「英語辞書学」であり、私は普段は電子辞書やEFL辞書(非母語話者向け英英辞典)などを細々と研究しており、サブカルチャーは私にとって趣味の範疇に近いものです。いわゆる様々な「ヲタク文化」にせよ、アニメやゲームにせよ、それぞれそれを文学論・芸術論・比較文化などの観点から専門として研究されている方々は日本中に何人もいらっしゃるわけで、今回の講演も、果たしてともに皆さまに聴いていただけるのだろうかという正直講演前は不安しかありませんでした。

また、アニメやゲームという、普段皆様があまり接することのない話題に、皆様が終始ぼかんとされるのでは、という危惧もありました。

そんな中、総合司会や司会の方々がうま

くその場をまとめてくださり、さらに定例研究会後の情報交換会では、何人もの方々が有り難い質問をしてくださったり、好意的なコメントをくださったりで、非常に心を強くしましたとともに、お話をさせていただいたことは無駄ではなかったんだ、と何とか胸を撫で下ろした次第でした。

今回の講演が形になったのは、1つにはクレイゴ氏を共同講演者に誘ったことが大きな要因だったと考えています。情報交換会では、多くの方がクレイゴ氏がゲーム、特にJRPGを通じて日本語に興味を持たれたいきさつ、あるいは海外の方々の日本のサブカルチャーへの関心などに関して質問をされていました。海外で評価の高い日本のサブカルチャーの海外での受け止め方や影響については、我々皆が大変興味あるところです。クレイゴ氏がいい意味での現役の「ヲタク」であったことが、今回の講演を非情に実のあるものにしていただいたことは間違いありません。

ちなみに、3月の情報交換会では、どこま

だが「ヲタク」か(例えば広島カープの熱烈なファンは「ヲタク」か?など)について割合と話が盛り上がり、最終的には我々「研究者」は言ってみれば皆ヲタクであるという結論(?)に多くの方から賛同をいただきました。この時も一瞬ではありますが連帯感を感じ、心を非常に強くさせていただいた次第です。

思えば私が日本のサブカルチャーに興味を持つようになったきっかけは東京の秋葉原にありました。元々私は中学時代からラジオなどの電子回路に非常に興味があり、中学3年の時も受験で地元三重の鈴鹿高専の電気科に受かってしまい、そこに行って将来は当時花形だったラジカセやコンポの設計を夢見ていたのですが、高校に進学して大学に入ってからもその道に進めるからと親や進路指導の先生に説得され、とりあえず松阪高校の普通科に入学しました。ところがたまたま高校の英語の先生のお一人が東京外語のご出身で完全にその先生に感化されてしまい、高校2年の頃には通学の片道45分のバスの中で小川芳男先生の『巷の英語』全3巻や河野一郎先生の『翻訳上達法』を何度も読みふける、英語「ヲタク」になっていました。

上京後も、電気の道は趣味として残り、学生時代もそれ以後も、週に1度は秋葉原に通う「電気少年」になっていました。ところが人生で通い詰めた秋葉原が、2000年代前半頃から急速に変容を遂げ始めたのです。秋葉原の名だたる大手電機店のビルが次々と、ビル全体にアニメやゲームのキャラクターをまとったサブカルチャーの店に置き換わっていきました。特に2004年頃から、アニメなどの絵柄が急速に向上したことも

その変容を加速させた一因となりました。その頃から、私も気が付くとサブカルチャーの店内にいることが多くなりました。

秋葉原とその変容がなければ、私もアニメ・ゲーム系のサブカルチャーに目覚めることはなかったとは思いますが、考えれば電子機器や電化製品もマニアックな趣味の対象となりうるものです。結局、私自身も中学の頃から一貫してヲタク体質を持っていて、秋葉原の街自体も戦後電機大生が小遣い稼ぎにラジオを売り始めた頃から「ヲタク」の街だったのかもしれませんが。(今でも、秋葉原は鉄道模型からメイド喫茶まで、ありとあらゆるヲタクのニーズに応え、受け入れてくれる宝箱のような懐の深い街です。) 今後も私は(講演時に少し触れましたが)「誇り高きオタク」でいつづけたいと思っています。

今回、私が「サブカルチャー」についての講演をさせていただくことになったのは、前会長の森住先生が「小川君、ぜひAJELCの講演でサブカルチャーについての君の講演が聴きたい」と言ってくださったことがきっかけで、そのようなきっかけを与えてくださった森住先生には心より感謝しています。

また、自分の専門外の講演を何とか果たすことができたのも、英語学・英文学・英語教育、果ては日英の枠を超えた多言語・多文化を暖かく迎え入れてくれるAJELCの心の広さ、懐の深さ故だと思っています。多彩なジャンルの奥津先生を慕うご友人・教え子の方々から始まったそんなAJELCに身を置いている自分はその意味で大変幸せだと感じています。皆様も、これからぜひ「これは面白い、他の人に伝えたい」ということ

がございましたら、ぜひともジャンルやご専門にかかわらず、AJELC でシェアしてください。研究などの発想は何が「きっかけ」になるかわかりません。皆さま

のジャンルを超えた情報・知識の共有によって、会員全体の知見もさらに深まることと思います。これからも皆様 AJELC をどうぞよろしくお願いいたします。

(成蹊大学教授)

## 第 75 回定例研究会報告

2020 年 12 月 12 日(土) 14:30 – 17:00

於：Zoom ミーティング

### 講 演

## ジェンダーと英語教育

石川 有香

昨年の 12 月の例会で、講演の機会を頂戴した。小川会長はじめ執行部の先生方、また、講演を聞いてくださった先生方に厚く御礼申し上げたい。早いもので、例会から 4 ヶ月が過ぎ、学年歴も新しくなった。今年は、多くの学校で、桜の咲く中での入学式が行なわれた。ただし、コロナ禍での学校生活では、昨年に引き続き、マスクの着用、手洗い、アルコール消毒、「黙食」などの新たな生活習慣の指導が加わっている。

学校において、児童生徒は、学習指導要領に定められた知識や技能だけではなく、社会生活に適応するための基本的な生活習慣、友達の作り方、他者に対する言葉遣いや振舞い方などを学び、行動規範や社会的価値観を形成していく。子供たちにとって、学校・先生・教科書は「権威」であり、自分も他者も、学校で定められた「規範」にはめ込

んでいかねばならないと考える。この意味において、教師の一挙手一投足、教科書の一言一句が影響を持っていると言える。学習指導要領に明文化されたカリキュラムとは異なり、教育する側が意図するしないに関わらず、学校生活の中で、児童生徒らが自ら学びとっていく「隠れたカリキュラム」の存在が確認されている。学校という場が存在するからこそ、次の世代に伝承されていく貴重な伝統文化もあるが、学校生活が、児童生徒に特定のステレオタイプを押し付け、その後の人生の選択の幅を狭めてしまっている可能性は否定できない。

日本語では、男女の区別なく、「様」や「さん」を敬称として用いることができるが、英語では、女性と男性に異なる敬称が用いられる。特に、女性には、Miss/Mrs/Ms という複数の敬称使用があり、どのような場

合にどの敬称を用いるのかが問題となる。また、単数代名詞も、性によって使用が異なる。性が明示されていない場合は、どのような単数名詞をどの代名詞で受けるのかといった問題が出てくる。特に、職種名称や価値判断を表す形容詞を伴った名詞を受ける場合には、ステレオタイプと結びついた代名詞の選択が行なわれる可能性もある。さらに、英語には、通常は男性を示す **man** や **he** 代名詞を総称的に用いる表現が、使用されてきた経緯もある。学校教育の場においては、こうした英語表現を、どのように学習者に提示し、どう指導していくべきだろうか。

現行の中学校用英語教科書を見てみると、性差別性が指摘されてきた **man** や **he** 代名詞の総称用法は使用されていない。言語材料の選択には配慮がなされていることが分かる。また、女子生徒と男子生徒の登場人物数が同数にそろえられていたり、女性も男性も職業を持ち、家事を分担していたりする場面が描かれているなど、題材においても、男女平等の観点から一定の配慮がなされていると言えよう。ただ、未だ、ジェンダー・ステレオタイプが残されている個所も散見される。たとえば、女性の敬称を **Ms** に統一せず、あいまいな「基準」とともに複数

の敬称を提示している場合がある。また、イラストや写真では、書道をする女子とサッカーをする男子など、多くのジェンダー・ステレオタイプが描かれていることも分かった。イラストや写真では、英語の理解を補助するために、「わかりやすさ」や「親しみやすさ」を優先していることがあるかもしれないが、教科書において、ステレオタイプを提示することは避けるべきである。

我が国の英語教育の目的のひとつは、英語学習を通して、ことばと文化への関心を高め、異なる文化的背景を持つ人々を理解し、尊重する態度を育成することである。異なる価値観を受け入れ、他者を尊重するためには、自分自身をステレオタイプから解放することが肝要となる。学校という場においては、特定の行動規範や価値観の構築を促すと同時に、他者の立場に身を寄せて、多元的観点から物事を捉えるための「想像力」の育成が不可欠といえる。アルコール消毒ができない化学物質過敏症のクラスメートがいるのではないかと想像する力、ステレオタイプに基づく言動によって生きづらさを感じている人がいるのではないかと想像する力を育成することも、学校教育に求められている。

(名古屋工業大学教授)

## 講演

# 日本の英語教育を問い直す 8 つの異論 — 英語教師 50 年の不安とその解決の試み —

森住 衛

「8 つの異論」は、私が英語教師を始めた当初に感じた、以下の不安や疑義が元になっている。この中には、小中高生からの英語教育に対する不信や他教科の教師の意見も含まれる。

- ・英語はそのまま覚えればいいのか、考えなくていいことになるのか。
- ・自動翻訳が本格的になったら、今の程度の英語教育は価値がなくなる。
- ・つまり英語は植民地主義で広まった言語だから教えるのか。大義は大丈夫かな。
- ・英語を学ぶと国際的になるってほんとかかな。反国際的な人が結構いるよ。
- ・英語教師の正体見たり！ 結局、得をさせるために英語を教えているのだ。
- ・中学校 9 教科の中で英語の授業が一番生徒の「なぜ」に答えていない。
- ・英語教師は楽でいい。動機付けを考えなくても生徒が勉強するから。
- ・語学と体育は知的要素がないため大学教育にはそぐわないでしょう。
- ・日本人は英語を話せないのに、他の国の人の英語の発音をばかにするね。
- ・ことばの教育で、これが正しくてこれは間違いだなんてなぜ言えるのか。
- ・ぼくに向かって Are you a boy?なんて、ばかみたいなことなんで聞くの。

この不安・疑義の解消や批判・不信に対する弁明を考えた結果が、英語教育はこうあるべきだという以下の 8 つになった。

### 1. 外国語教育目的論

英語教育は実用性重視に傾斜し過ぎている。人格形成と恒久平和という本来の目的を学習指導要領の冒頭に掲げて、周知徹底すべきだ。

### 2. 複数言語導入論

小学校から大学まで英語を必修、その他の数カ国語か 1 つを選択必修にする。子どもたちや若者にいろいろな言語文化の学習を保障したい。

### 3. 認知的指導論

英語の授業の中心に言語材料に関する生徒からの「なぜ」を取り上げる。ことばの仕組みは「わかる、面白い、不思議だ、大切だ、怖い」を知らせたい。

### 4. 「読む・考える」活動重点論

5 つの言語活動のうち、「読む」「考える」活動で全体の半分以上を占めるくらいに重視する。この 2 つの能力は生徒全員に身につけさせたい。

### 5. 英語教育題材論

初期の英語教育の題材の幼稚化を是正する。また、全体として、ことばの社会性や異文化理解など外国語教育特有の題材を取り上げる。

## 6. 日本人名のローマ字表記論

日本人名のローマ字表記は、日本文化のアイデンティティーとして、<姓+名>の順序にする。氏名の順序を英語に「同化」しているのは日本だけぐらいだ。

## 7. 英語国際補助語論

今や *Englishes* の時代である。統語など文構造や文法の核の部分を保ちながら、慣用表現などは国や地域の人たちの志向や発想を込めた英語を堂々と使う。

## 8. 英語教育反国際論

英語教育は、その営みにおいて宿命的な

反国際性と意図的な反国際性を伴う。この議論を通過せずに英語教育をおこなうのは危うい。

以上の 8 つをこれまで提案したり、実践したりしてきたが、この大半は文科省の外国語教育政策や学習指導要領に対する疑義や批判でもあった。このような提案や実践は当然ながら私だけではないが、全体としては少数派である。その意味でこの 8 つの論点は「異論」と言える。

(大阪大学・桜美林大学名誉教授)

## 第 76 回定例研究会報告

2021 年 3 月 13 日(土) 14:30 – 17:00

於：Zoom ミーティング

## 研究発表

### ことわざを「翻訳」する難しさー明治期の英語資料からー

鈴木 雅子

明治期、江戸時代の長く閉ざされた日本が開国したことで、一気に西洋文化が日本に入ってきた。新しい物、新しい考えを取り入れるにあたり、明治期には新しい言葉が多く生まれている。そして新しい価値観をもたらす表現として、ことわざも取り入れられた。例えば、現在では日本古来のことわざとさえ感じられる「時は金なり」。これは *Time is money* が翻訳され、日本に定着したものである。*Time* は明治時代に日本にも

たらされた新しい概念であった。

ここでは、英語のことわざがどのように日本語に翻訳されたのかではなく、日本のことわざがどのように外国に向けて英語で紹介されていたのか、明治期の資料を検証した。イギリス公使館勤務の William George Aston 等がまとめ、1872 年に月刊誌 *The Phaenix* に 3 回にわたって投稿した“Japanese Proverbs”では合計 74 のことわざが紹介され、東京帝国大学外国人教師

を務めていた Basil Hall Chamberlain は 1888 年に出版された *A Handbook of Colloquial Japanese* にことわざのセクションを設け、40 のことわざを挙げている。日本人による紹介としては 1892 年、当時のロンドン領事であった大越成徳が、ロンドンのジャパン・ソサイエティにおいて “Japanese Proverbs and Some Figurative Expressions of the Japanese Language” を発表しており、そこには合計 78 のことわざが確認できる。

まず、これら資料に記載されたことわざが現代にも通用する一般的なことわざと言えるかどうか、現在のことわざ辞典を参照した。Aston が最初に紹介した 40 のことわざについては、実際にはことわざとは言い難い表現もあり、4 割の表現が参照したことわざ辞典には収録されていなかった。しかし、その他の資料については収録されていない表現は 1 割にも満たず、ほとんどのものが現在でもよく知られていることわざであることが分かった。

次に、日本語のことわざがどのように翻訳されていたのかを検証した。ことわざの翻訳には、比喻を生かした直訳に近いものと、ことわざの論理を生かした意識に近いものがある。先行研究や辞典等の資料が限られていたこの時代、すでに、現在に通じる「定訳」が充てられたものもあった(例: 郷に入っては郷に従え→When you are in

Rome, do as Rome does.)。自身で翻訳を試みたであろう大越を見てみると、現在に根付いているとは言えないが、「転ばぬ先の杖」を *Though the sun shine, leave not your cloak at home.* と比喻を生かして翻訳したものもあった(シェークスピアのソネットから引用したと思われる)。また、ことわざの意図するところが異なる翻訳(例: 雑魚の魚交じり→*As the old cock crows, so crows the young.*)も見られたが、論理を生かす翻訳も見られた(例: 鰯の頭も信心から→*Believe well and have well.*)。

ことわざはいつの時代も変わらないもの、と捉えられることが多いが、実際には変化を伴う。例えば、「縁の下の力持ち」は現在では良い意味で使われることがほとんどだが、明治・大正頃までは否定的に用いられていた。Aston による意味説明には *Vain effort* とあり、当時は否定的であったことが分かる。また、現在では当たり前のように使用されている「豚に真珠」や「時は金なり」は収録されておらず、代わりに「猫に小判」「一刻千金」が載せられている。現在、私たちは先人による様々な資料を参照することができる。しかし、ことわざの解釈を誤って伝えているもののみならず、時代により異なる解釈があることに留意する必要がある。

(昭和女子大学助教)



**研究発表****英語発話を音調群に分割する重要性と音楽表記化で理解する  
その具現化方法**

田中 ケアリー

本発表では、音調群が英語発話へ及ぼす重要性について述べた。その際、その具現化方法を音楽表記化で示したが、文字数の制限もありここでは割愛させて頂く。英語は周知のように強勢の等時制で発話され日本語の音節の等時制とは異なり、特に日本人英語話者は、故意的に強い強勢音がほぼ同間隔で聞き手に感じられるように発話する必要がある。更に中立表現では最後の内容語が核音調を帯びるので、核音調の付け方ではピッチの変化を聞き手に感じ取ってもらえるような具現化方法にする事も必須だ。ただ、これらの発話方法が、脚を基盤とした音調群の中で具現化されている事を再認識する必要がある。実は、音調群は1文に1つの音調群という括りで発話される必要はない。大袈裟に言えば、発話者が作りたいただけ音調群を1つの発話文中に作る事も可能なのだ。何故なら、話し手が伝えたい情報を「小さな語の塊」に分け、発話文の情報を小分けにした「情報の単位」として聞き手に伝えるのが一般的な発話方法であり、聞き手には理解しやすく、話し手には考えをまとめながらの、話し易い発話方法になるからだ。そして、この小分けの「情報単位」こそが、音調群なのである。

従って、話し手は「音調群の切れ目の合図」を聞き手に感じ取らせる事が必須となる。当然、文末における音調群の終わり方の合図もあれば、文章の途中での、いわゆる非

文末の音調群の終わり方もある。これらの合図が聞き手に感じられないと、発話中の語の連なりが理解可能な「情報の単位」として感じ取って貰えない事になり、通じない原因の一つになる。このため話し手は、音調群の切れ目の合図は核音節の脚を引きのびしながら、核音節の母音を明瞭にゆっくり発音し、更にピッチの変化も伴わせながら発音し、その終わりでポーズや息継ぎをする。文章の終わりでは、当然息継ぎが必要であろう。しかし、話したい情報がまだ続くという合図を与える「非文末音調群」の切れ目の発話方法は少々異なり、もしその音調群の後続が脚前余剰部で始まる場合は、この部分を速く弱くピッチも低めで発話する。これにより話し手の発話文はまだ終わっておらず、次の「情報単位」が始まった事を聞き手に感じさせられる。非文末の核音調は上昇調が多いが、下降調もアメリカ英語ではよく使われ、その場合下降調は「部分下降調」で、ピッチは少々上がったように聞こえてから下降するが、途中で下降が止まってしまう抑揚方法だ。そして、非文末の音調群が繰り返す発話では、その度に息継ぎはせず普通は2、3個の音調群ごとに息を継ぐ傾向がある。それは、音調群の長さは普通の会話では1～2秒で、大きく息を継ぐ必要もなく、短いポーズやピッチの変化が現れる事で音調群の切れ目を感じ取らせられると考えるからだ。

中立表現として聞こえる発話は、1 音調群内に内容語はオンセットと核だけで2脚になり、3 つ以上内容語が含まれる音調群は、強調発話表現として聞き手に受け止められる。長い発話文では内容語が増えるので、そのまま発話すると脚数が多くなり強調表現の響きが強くなるが、3 つ並ぶ内容語は三連規則で中央の強勢音節を降格させる「降格の原理」を駆使しながら、長文を幾つかの中立表現の音調群に分割する事で、強調発話から逃れる事ができる。また、音調群の切れ目は文法の切れ目や句読点とも一

致するので、文法的に不明瞭な文章でも発話では、音調群の分割により意味を明確に伝えられる。ただ、中立的発話表現では意味的に密接な音調群内の品詞は切り離さない事も大事である。

発話での情報伝達には母音や子音の発音も大事だが、その英語発話に、聞き手が感じ取れる脚の等時制や核音調の具現化があり、更に発話文の内容に適した音調群への分割があれば、聞き手には理解し易く、話し手には話し易い、より効果的なコミュニケーションが可能になると考える。

(東洋大学兼任講師)

## 講演

### いわゆる日本のサブカルチャー： アニメとゲームの現状・魅力とそれらにまつわる日英語

小川貴宏

クリストファー・クレイゴ

アニメやゲームをはじめ、いわゆる日本のサブカルチャーは、日本国内ではもとより、最近では海外での評価や注目が高い文化の一大潮流である。今回は、特に様々な日本のサブカルチャーの中でもアニメやゲームに焦点を当て、それらの現状・取り巻く環境やそれらの中で用いられる言葉などを少しでも知っていただくべく、概説的に紹介させていただいた。

まず最初に、日本語の「サブカルチャー」および英語の *subculture* の定義、および双方の違いを考えた。英語の *subculture* は裏社会的なニュアンスを含めたその社会の文化全体の部分集合を指す一方で、日

本語の、あるいは日本における「サブカルチャー」は「ハイカルチャー」や「メインカルチャー」と共存しながら、特に 1980 年代以降の文脈において大衆文化の一部が独特の発展を遂げたいわゆる「オタク文化」と重なる部分大きい。サブカルチャーの愛好者は、通常自分がそうした文化を愛することに誇りを持っていることにも着目すべきである。

昨今の大学では、国内外のサブカルチャーへの興味の高まりを受け、研究・創造・人材育成の各分野において、国際的な発信や受け入れも念頭に関連学部や学科を設けるところが増えてきており、人気も高い。

マンガ・アニメ・ゲーム・ライトノベルを主軸としたサブカルチャーの広がり、音楽や映像表現、インターネットの普及や関連商品・イベントなどの展開と相まって裾野が広がり、大きな産業群となっている。

世界の中で日本が大きな発信力を持つ  
上記 4 ジャンルは世界的広がりを見せている。本講演ではそうしたジャンルの中で典型的に用いられる言葉を日英対比の形でいくつか取り上げたが、英語でも日本語をそのまま使っているものも数多く、非常に興味深い。

昼アニメ・(深)夜アニメを問わず、典型的な日本の 30 分アニメのフォーマットは半世紀以上の歴史の中で本編前後のテーマ曲の秒数までほぼ決まっている。

日本のアニメの最近の trope(典型的なテーマ)には、「異世界転生」「擬人化」「学園生活」「4～5人のヒロインによる部活や趣味活動」「主人公男子と複数女子」「武器を操る女子」「アイドルグループ」などが見られる。

今回の講演者の 1 人、クレイゴ (米国出身) は子供の頃からゲーム、特に日本発の RPG (JRPG) に魅せられ、翻訳されていないゲームを理解してプレイするのが夢だった。それが原動力となり、10 年以上日本語を勉強中。これは決して海外において特殊な例ではない。

JRPG の trope には、少年漫画と共通するテーマ、すなわち剣や魔法や竜といったファンタジーの要素、長い旅や冒険を通じ

て仲間や恋愛相手との出会い、全人類の存亡をかけた終盤でのラスボス (または神自身) との戦いなどが見られる。

アニメやゲームの作品に欠かせない要素として、声優というアイドルの存在があり、作品を超えて活動している。非常に狭き門で、それが日本の声優の実力を世界でも類をみないほどに高めている。

ビジネスの観点からのアニメやゲームはヒット作とそうでないものの格差が激しく、労働集約的・職人芸的な制作現場の構造とあいまって、制作側の不安定要素を作り出している。

特に、2020 年以降コロナウィルス感染拡大の影響で、巣ごもり需要が高まる一方で、様々な制約から一部のアニメ・ゲーム業界は収益を確保していくことが難しくなってきた。

世界から尊敬・注目され、国際的にも稀に見る独創性を持った日本発のコンテンツとして、日本のアニメやゲームをはじめとするサブカルチャーは単なる娯楽ではなく、文化的に、また言語文化を学ぶきっかけとしても様々な貢献やインパクトをもたらしており、日本が誇る数々の文化の一翼を担って今後もさらなる国際的な発展が期待される。

☆講演時のパワーポイント資料 (pptx ファイル) をご希望の方は、事務局までお知らせください。

(成蹊大学教授・  
埼玉県教育委員会職員)

## 会員の著書出版について

会員の岩崎永一氏が下記の本を出版されました。

岩崎永一. 2020. 『言語科学と言語哲学—生成文法基礎論と意味論』 東京: 金星堂

ISBN: 9784764712010

## 事務局だより

### 1. 会費納入・名簿整理について (重要)

2021年度が始まりました。会費の納入をお願いいたします。早めに以下の口座にお振込みをお願いいたします。

一般会員 4,000 円
学生会員 1,000 円 (院生を含む)
賛助会員 8,000 円

\*\*\*\*\*

銀行口座：三菱 UFJ 銀行

国分寺支店 普通 0132870

口座名：日英言語文化学会事務局

\*\*\*\*\*

本学会では会計事務の合理化のため、2020年度より会費納入は銀行振り込みに限らせていただいております。郵便口座は閉鎖いたしましたのでご注意ください。なお、お振込みにかかる手数料はご負担いただきますので、ご了承ください。

お振込み時に発行される「控」が領収書に代わるものとなりますので、改めて領収書は発行いたしません。書面での領収書が必要な場合は、事務局までご連絡をお願いいたします。

### 2. 名簿記載事項について (重要)

名簿記載事項に変更がある方は、事務局までお知らせください。特にメールアドレスを変更されている場合は、すぐに事務局 (ajelc@hotmail.co.jp) までお知らせください。事務局から案内や Newsletter をお送りするたびに、宛先不明で戻ってきってしまうメールが複数ございます。ご本人からお申し出がない限り、新しいアドレスにお送りすることができません。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

### 3. 第16回年次大会

第16回年次大会を次の要領で開催いたします。

日時: 2021年6月12日(土) 13:00-18:05  
場所: Zoom (URL等は別途お送りしております。)

内容:

13:00-13:10 会長挨拶

13:10-14:10 基調講演

「COVID-19の流行は教育にとって停滞か飛躍的チャンスか?—オンライン授業の教育的効果ならびに課題点とその克服—」  
鈴木 章能 (長崎大学教授)

## 14:15-14:45 研究発表

「コロナ禍で考える教師と学習者のつながりー日本語学校オンライン授業実践を通してー」

横田 葉子 (淑徳日本語学校 教員)

## 14:55-15:25 研究発表

「オンライン版「ツバル言語文化辞典」の意義・内容・展望ーツバル語の未来をみずえてー」

橘 広司 (金城学院大学准教授)

星 泉 (東京外国語大学教授)

## 15:30-16:30 基調講演

「DX時代の反転学習・協働学習・個別最適化学習と英語教育」

下山 幸成 (東洋学園大学教授)

## 16:30-16:35 閉会挨拶・諸連絡

## 16:35-17:05 会員総会

## 17:05-18:05 情報交換会

**4. 定例研究会での発表者・講演者募集**

定例研究会は、3月、9月、12月と、年3回、開催いたします。発表者および講演者を随時募集しております。自薦他薦は問いませんので、事務局までお知らせください。なお、発表は会員の方に限ります。

**5. 紀要第8号 原稿募集**

2021年度は紀要の発行年度となっております。投稿予約は2021年6月30日(水)、投稿締切は2021年9月30日(木)となっております。ご寄稿をお待ちしております。詳細については、既にメールでお送りしておりますが、ご不明な点がございましたら、事務局までお問い合わせください。

**編集後記**

今回も先生方のご尽力を賜り、Newsletter 61号を発行することができました。編集に携われる貴重な機会をいただき御礼申し上げます。新年度開始でご多用中の折、またコロナ禍の中、ご寄稿いただきました先生方に改めて御礼申し上げます。原稿を拝読し、人間は困難に遭遇しても知的活動の営みを続けることができることを改めて認識いたしました。これを励みに、自分も研究活動を続ける所存です。世界中でウイルスの脅威は続いております。先生方におかれましては、どうぞご自愛くださいますようお願いいたします。 (T.E)

## AJELC Newsletter 第61号

2021年5月23日 発行

発行人：小川 貴宏

編集：日英言語文化学会 (AJELC) 広報通信委員会 水澤祐美子・山崎千春・青木理香・江連敏和

発行所：日英言語文化学会

(〒120-0045 東京都足立区千住桜木2-2-1 帝京科学大学 馬場千秋研究室内)

E-mail: ajelc@hotmail.co.jp